

## 昇段レポート



太 田 清 貴 四 段 (岐阜太田道場)

～2008年2月24日 取得～



少年時代、小中学生の頃、『空手バカー代』『地上最強のカラテ』に憧れていましたが、高校生の時に読んだ『極真への道』という本に感銘を受けていました。今から26年余り前、20才の時に大石道場静岡支部(浜松)に入門しました。帯を取りたいとか、大会に出たいとか、そんな気持ちはなく純粹に強くなりたいという事しかありませんでした。

大石主席師範は、当時も「基本、移動、型、組手があってこそその極真空手である」と言われていました。今でもその信念は変わってみえず、道着を着て先頭に立たれ指導され、私自身も本当に良い師に出会えたと思っています。

現在は柔らかくなれましたが、当時は厳しく怖く、とても道場生が声をかけられるような感じではありませんでした。

四段の審査は、昨年春「2月にある公認審査会を受けるように」と言われ、備えてきました。6月に型合宿に参加し、型を覚え、よい手本を見ながら指導を受けました。「ひとつの型は3千回やれば自分の型になる」と話され、繰り返してやる反復の大切さを話されました。型の上手な人は、正確さと力強さ、速さ、間、そして柔らかさがあり、同じ型をやっても人によって違い、奥が深いと感じました。それと補強をしましたが途中でつぶれ、今の力を再認識しました。補強をしてから40ラウンド組手ができるのか不安でした。型と補強に重点をおき、組手はあまりやらず、走ることとスタミナ練習をしました。

1月の世界大会のセミナーでは芹澤事務局長と、田原先生がご指導してください、今やるべき自分の課題が残りました。観空や五十四歩の型は、大山総裁やえらい師範がやるものと思っており、見向きもしませんでした。まさか自分がその型の稽古をする・やるというのは夢にも思いませんでした。

また1月の末には、型稽古と聞いて参加しました。5時間以上も行われ、型だけと思っていたのですが、型はもちろん移動、補強(拳立・腹筋・スクワット)50回×5セット、40ラウンド(組手・シャドウ・サンドバッグ)があり青息吐息でした。夜は体が熱くなり、なかなか寝られませんでした。

翌日も稽古がありました。

この時は千葉の田中规順先生と一緒に大変な目にあいました、、、。

夜は太田道場の指導があり、乾かないそのままの汗の染み込んだ冷たい道着を着てやりました。寒いのに、冷たいのに、痛いのによくやりました。

審査の当日は、前日に雪が降っており寒い日でした。岐阜からは誰も来ないだろうと思っていましたが14人も来ており責任を感じました。当日に急に強くなったり、弱くなったり、上手下手になったりしないから、今の自分を出せばいいと思い臨みました。

午後1時30分、大石主席師範の号令のもと準備体操から基本・移動・型・補強・組手と行われました。師範から「型が前よりもよくなった」と嬉しい言葉をいただきました。補強も何とかかなり組手になりました。型と補強で多く汗を出したので体が軽くなりました。

足さえ止まらなければやれるというものはありませんでしたが、20人位過ぎてから息が苦しくなり、もつかなと思いましたが、何とか40人完遂することができました。

今回50代・60代の方々が、補強を同じ回数をやってみえられ驚きましたが、年齢で言い訳せずに挑戦することに大変感銘を受けました。武道には年齢はないと言いますが、実際に行動してやるということは簡単ではありません。

私も年齢で言い訳しない人でありたいと思っています。

入門した頃は、強さとは喧嘩や組手が強くということしかありませんでした。年数を重ねて、組手が強い、型が上手、スタミナがある、大会で勝つという表面的なもの、志を持つ、努力する、工夫する失敗にめげない、逃げない、人のせいにならない、あきらめない、そして弱い人を手助けしてあげるといった内なる心の強さに気がつきました。

審査当日まで、自分の心の中に内なる心の闘いがありました。終わってからも反省もありましたが私なりにやったという満足感もありました。

大石主席師範はじめ、田畑理事長、小井理事、芹澤事務局長、各先生方、各道場生、皆様方、よい試練の場を与えていただき、また見守ってくださり、ありがとうございました。

一緒に受審した方々にも厚く感謝申し上げます。

押忍